

波佐見町 朝飯会

県の中央部に位置する人口約15,000人の東彼杵郡波佐見町。農業と窯業が主な産業の町に12年は79万人もの観光客が訪れた。窯業が低迷しているなか、年間100万人が訪れる町にむけて多くのイベントの開催や、製陶所の跡地を活用して交流の場とすることなどに取組み、その結果観光客数をここ数年で大きく伸ばしている。

この成果の背景にあると考えられる「朝飯会」に、このほど参加の機会を得たので紹介する。

イベントと交流の場

○多彩なイベント

すっかり恒例となった「波佐見陶器まつり」は、今年初めて30万人を超える大きなイベントに成長した。陶器まつり以外にも、域内の交流人口をさらに増やそうと町や観光協会、窯業団体な

図表1 波佐見町の主なイベント

開催月	イベント名	開催開始年	内 容	およその観光客数(人)
1月	波佐見一周駅伝大会	1957年 今年57回目	新春の波佐見路を一本のたすきをつないで健脚を競う。町内22地区の地区別対抗で約35チームがエントリー。7区間30.2kmのコース	4,000
2月	壮年駅伝大会	1975年 今年39回目	選手たちが7区間7.6kmを走る。	400
3月	町民音楽祭	1989年 今年25回目	町文化協会主催による町民音楽祭	700
4月	桜陶祭	1989年 今年25回目	普段は覗くことができない陶郷中尾山の窯元17社が一般開放され、やきものの直売や窯元のウォークラリーで賑わう。	20,000
5月	波佐見陶器まつり	1959年 今年55回目	やきもの公園周辺を主会場に約130の窯元などが出店。	308,000
8月	はさみ夏まつり	1985年 今年29回目	婦人会による道踊りやよさこいチームの演舞、地元バンドの演奏を楽しみながらビアガーデンやおおよそ20の出店がある。おおよそ800発の花火が打ち上げられる。	13,000
9月	鬼木棚田まつり	2000年 今年14回目	全国棚田100選に認定された鬼木棚田周辺で毎年開催される。100体を超えるユニークな案山子が沿道に並ぶ。	20,000
10月	JRウォーキング	2003年 今年11回目	やきもの公園をスタートし、中尾山や鬼木棚田、金屋コスモス街道などをめぐる。「健脚コース」と「短絡コース」の2コースがある。	1,100
	秋陶めぐり	2002年 今年12回目	中尾山一帯で窯元見学や、お菓子や軽食などがふるまわれる。	3,000
11月	はさみ炎まつり	—	波佐見焼の器を購入（500円以上）で、郷土料理を楽しむことができる。	15,600
12月	皿山器替まつり	2005年 今年9回目	不要な器を新しい器に替える企画。自宅にある器を持っていくと好きな器を各店1点のみ定価の5割引きで購入できる。	9,600

資料：波佐見観光協会ホームページやヒアリングなどを基に当社にて作成

どが一体となってほぼ毎月、イベントを開催している。

主なものだけでも、4月の桜陶祭、8月のはさみ夏まつり、9月には鬼木棚田まつり、10月には秋陶めぐり、11月にははさみ炎まつりなど、四季折々に多彩なイベントが開催されている（図表1）。

○地域の資源を活かした交流の場

400年以上もさかのぼることができる波佐見焼の歴史や町の豊かな自然、といった地域資源を活かした交流の場も整備してきた。

このうち『文化の陶「四季舎」』は、使われなくなった製陶所を活用して農業体験と窯業体験をあわせた交流事業（グリーンクラフトツーリズム事業）の拠点として04年にオープン。陶芸体験や、窯でピザを焼く珍しい体験ができるなど、波佐見町ならではの体験型観光のスポットとなっている。

また、05年からは町内の西の原地区で、県外から来た若者が中心となって製陶所のレトロな建物の雰囲気を活かして雑貨、文具、インテリアなどの店舗を構えるようになり、美術作品の展示に加え、コンサートなどのイベントも開催されるなど特に女性客に人気のスポットとして年間3～4万人ほどが訪れる。



朝飯会の会場 西の原 南創庫

さらに10年には、町が新しい源泉を掘削し長年途絶えていた温泉が復活することとなり、癒しのスポットとして年間10万人ほどが訪れる。

波佐見町の窯業

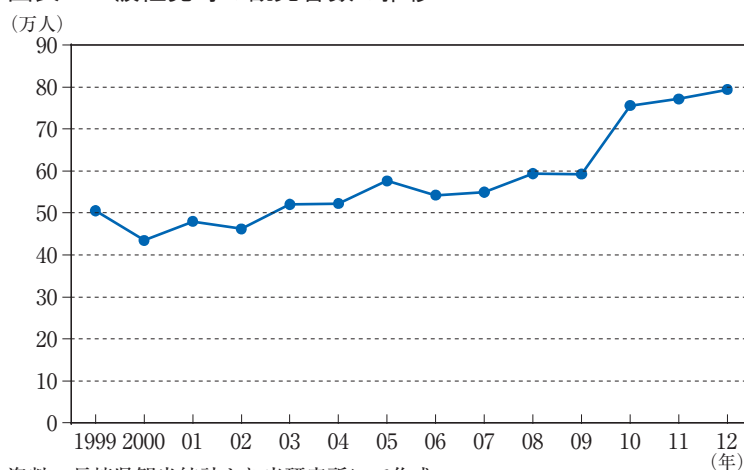
波佐見焼は江戸時代には「くらわんか碗」（飯碗）や、海外輸出用の「コンプラ瓶」（酒瓶）として親しまれ、現在でも全国の一般家庭で使われている日用食器の13%を生産しているが、波佐見焼の知名度は他の産地と比較すると高くはない。これは、かつて波佐見で生産された陶磁器が、伊万里港やJRの駅がある有田町から発送されていたために伊万里焼や有田焼として扱われていたことが大きな要因の一つとして挙げられる。

町の窯業関連データをみると、最盛期の1980年には事業所数が606、出荷額は230億円に上っていたが、08年には373事業所、79億円へと減少しており厳しい環境となっている。

その要因は、安価な中国製食器の輸入が増加したことに加え、弁当や総菜のパッケージなど使い捨ての容器が普及し使用する頻度が増えたこと、若い世代を中心にライフスタイルが変化し、陶磁器に興味を持たない人が増えているなど嗜好が多様化してきたことなどが挙げられる。

町の主力産業である窯業がこのような厳しい環境となっているなかであって、毎月のようにイベントを開催し、地道に継続していくことで、それが恒例化してきたことや、交流の場への観光客の受入れが軌道に乗ってきたことなどから、02年は46万人ほどだった観光客数が10年には70万人を突破、12年は79万人に上った（図表2）。町を挙げて観光客を呼び込むことによって町が元気を取り戻しつつあるが、こうしたことの背景には、実は「朝飯会」のもたらした影響が大きい。

図表2 波佐見町の観光客数の推移



資料：長崎県観光統計より当研究所にて作成

朝飯会

7月6日土曜日、町内で開催された『朝飯会（ちょうはんかい）』に参加してみた。朝飯会とは月初めの土曜日の朝6時半から2時間程度、朝食をとりながら参加者がそれぞれの情報を持ち寄って意見交換する、というもの。

98年10月から開催され今年で15年目を迎えたこの会は、児玉盛介氏（西海陶器株式会社代表取締役社長）が主宰しており、この日は123回目の朝飯会であった。

参加者は、町長や町議のほか、県や長崎市、商工会、農業、窯業、観光、JR九州、病院、新聞社、



朝飯会の様子

銀行などの関係者で、今回は26名が町内外から業種や世代を超えて集まった。

この会の目的は、地域の中だけにとどまらず、域外の人との交流を広め、地域の活性化に繋げていくことである。

この日の朝飯会では「観光・イベントの予定」、「おもてなし」、「町の人口の推移」といったことなどが話題となった。会では議事録などの記録はとっていないが、そのためか自由な意見が活発に出ている。

参加者からは、『他の参加者の近況や日頃考えていることなどの話のなかに、例えば、「住みやすいまちへ」、「観光客がまた訪れたいまちへ」といった自分たちも参加できる“まちづくり”につながるヒントがある』といった意見や、『朝飯会は参加者のおよそ半数が町外からの出席者であり、町内のことにとどまらず毎回面白い話を聞くことができる』などの意見が聞かれた。

また、回を積み重ねていくことによって「域外の活力を如何に域内へ取り込んでいくか」、「町内で開催されるイベントを如何にして盛り上げ誘客に結びつけていくか」といった様々なアイデアが生まれている、という。

さいごに

朝飯会は、「どうすれば地域が元気になっていくのか」を大きなテーマとして参加者が主体的に考え、町外からの視点を含め意見を出し合う場となっている。そして自由な意見を交わしあった内容が具体的に動き出し、少しずつ「まち」を変えていくきっかけとなっているように思われる。

時代の変化により、かつての基幹産業の力が落ち地域活性化の道を模索する、というケースは枚挙に暇がないとも言えるほどであるが、こうした多くの地域にとって波佐見町の取組みは一つのヒントになるのではないだろうか。

(泉 猛)